

## 第11回スポーツリレートーク報告

「仙台・宮城スポーツの今 ～ ブラインドサッカー アジア選手権がやってくる」

講師 JBFA（日本ブラインドサッカー協会） コーディネートコーチ 増田 茂樹 氏

開催日 11月4日（金） 19時 ～ 21時

場所 エル・パーク 特別会議室

参加 12名



アイマスクをしているのが増田さんです。

はじめまして。JBFA コーディネートコーチの増田茂樹（ますだしげき）と申します。本日はどうぞよろしく申し上げます。はじめに簡単に自己紹介をさせて頂き、それからブラインドサッカーのご説明に入りたいと思います。

私は生まれも育ちも仙台で、大学卒業後に都内の企業に就職し、勤務と夜間の専門学校でデザインを学ぶ生活を5年ほど送った後、2004年に仙台へ戻って参りました。現在は実家で学生服の製造卸や社交ダンスの衣装販売の営業をしております。

私がブラインドサッカーに関心を持ったのは2006年です。ベガルタ仙台主催のバリアフリーサッカー教室で初めてその存在を知りました。もともとサッカーについては94年W杯アジア最終予選の「ドーハの悲劇」から興味を持ちはじめましたが、その後2006年W杯の日本代表の惨敗を期に、自分の中でサッカーに対するマンネリにも近い停滞を感じ、それを打破するためにも、もっと様々なサッカーを見てみたいという気持ちからバリアフリーサッカー教室に参加しました。

障害者と接することは私自身もそうでしたが、まず「怖い、どう接していいのか分からない」と感じる方が多いと思います。しかし、実際に接してみると、障害を持っている以外は自分と変わらない、サッカーやスポーツで遊ぶ事が好きな人達がほとんどでした。サッカーを通じていろいろ話したり遊ぶ事ができ、その楽しい時間はあっという間に過ぎて行きました。今でもそうですが、接することから障害の事や苦悩などいろいろ知りました。はじめに自分が抱いていた「怖い」という気持ちは徐々に薄れていきました。

そして翌年1月のバリアフリーサッカー教室にブラインドサッカー日本代表の選手たちが現れ、我々の前でプレーを披露しました。そのスピードとテクニック、アイマスクをしたままごく当たり前にサッカーをする姿にショックを受け、ただただ圧倒されるばかりで言葉が出てきませんでした。その選手たちも一旦サッカーを離れ昼食を一緒に食べ、話しをしている時はどこにでもいるごく普通の人たちです。このギャップにも軽い衝撃を受けました。同年の夏には関東リーグの公式戦が貝ヶ森小学校の校庭で行われ、そこでの白熱した真剣勝負を見て更に興味が掻き立てられ、もっと多くの試合を見てみたいと思い、2008年に東京・調布のアミノバイタルフィールドで行われた第6回日本選手権に行きました。以降、日本選手権は今年5月にJ1アビスパ福岡の本拠地、福岡フットボールセンターで行われた第10回大会まで毎

回観戦するに至ります。また、昨年8月に英国のヘレフォードで開催された第5回世界選手権 (IBSA World Blind Football Championship 2002年より4年に1度開催) も現地観戦し、ブラジルやスペインなど世界のトップレベルの選手が繰り広げる技や、高度な試合展開を実際に自分の目で確認してきました。

こうした経験等により、ブラインドサッカーの可能性や面白さを確信した立場から、一人でも多くの人にブラインドサッカーを、地元仙台で行われる真剣勝負の国際試合である「アジア選手権」を観て欲しいですし、何よりもサッカーを通じて障害者と晴眼者、健常者がふれあう機会をもっと増やしたいと思っています。

私は今年の7月に計10時間程の学科・実技講習を受け、コーディネートコーチの資格を取得しました。これはJBFAが今年から設けた資格制度で、ブラインドサッカーをする環境を整え、競技の普及や指導者、選手の育成を担う目的のものです。宮城には現在(私を含め)2名のライセンス取得者がいます。このコーディネートコーチ等の資格は2013年を目処に指導者や公式戦を指揮する監督に必須の資格になる予定です。また普及面では、日本を4つのブロックに分け、普及と啓発はもちろん、「サッカーを通じて視覚障害者と健常者が当たり前に混じり合う社会を実現すること」をミッションとして活動しています。

障害者と呼ばれる人々は日本全国に例年約320万人(申告等があり、厚生労働省が把握している範囲の数字です)いるといわれております。その中で視覚障害者は約30万人前後です(但し、弱視者で申告しない人もいます。その方はここに含まれていません)。では、ここでみなさんに実際に視覚障害がどのような状態か、簡単な体験をしていただきましょう。

---

★透明なプラスチックカップにうすい半透明のビニールの袋をかぶせたもの(2つ)を両目にあててみる。

～ 近くで手をかざしてもぼんやりとしか見えませんでした。

これは「視力」の疑似体験で、弱視0.1以下～光覚(光を感知できるレベル)の状況です。

人によっては手の動きを感知できる「手動弁」、指の本数まで感知できる「指数弁」など、

見え方は様々かと思えます。ですが通常生活するには、非常に困難や危険が生じやすい状況です。

★紙コップの底に大小2つの穴のあいたカップを両目にあててみる。

～ 視野狭窄の体験でしたが、視野が狭くなり、これでサッカーをするにはお互いに声をかけ合わないと、まずプレーは不可能です。バウンドしたボールはすぐ見失うくらいの狭さです。

人間の視野は通常110度くらいあり、その中で常に意識の範囲内に入るのは45度くらいです。

紙コップで覗いた視野は概ね5～10度で、視野を遮られると、途端に恐怖や圧迫感が生じると思えます。周りが見えないので、音(白杖などの反響音)や周りの声がないと、日常生活では接触や踏み外し、線路への落下にもつながります。

---

ブラインドサッカーには視覚障害の度合いによって3つのクラス分けがあり、全盲(視力0～光覚まで)のB1クラスで使うボールの中には鉛の玉や鈴が入っています。B2/B3クラスは弱視者が対象で一般のフットサルのボールを使います。私も実際にこの透明、紙双方のコップを目に当てた状況でサッカーを体験しましたが、その時の率直な感想は、わずかでも見えることで視覚の情報があると、見えにくいそこにかなり気をとられます。わずかな視覚があるB2/3の方がプレーをするのも大変でした。

B1クラスに話はもどりますが、日本全国に15のクラブチームがあり、競技者数は約400人前後です。視覚障害を持つ選手の進学や就労環境もあり、競技者も都市部に集中しがちで、地方では選手を集めるだけでも一苦勞というのが現実です。そのため日本国内の試合では、アイパッチをつけて2名まで晴眼

者もフィールドプレーヤーとしてピッチに入れる、というローカルルールを採用しています。ピッチはフットサルコートと同じ広さで、そこに両サイドに壁を設けます。ゴールキーパーはゴールを守るほかに、味方に状況や指示を声に出して伝えるという大事な役割があります。フィールドプレーヤーがボールを取りに行く際は「ボイ(スペイン語で「前・行く」の意)」とコールする義務があり、言わないと反則を取られます。また、ゴール裏にはそのゴールに向かって攻める側の味方がフォワードにゴールの位置などを知らせる「コーラー」というポジションもあり、随所に視覚障害者が自由にサッカーをできる工夫がなされています。

先天的に視力のない選手と後天的に視力を失った選手では、同じサッカーをするにもイメージが各々異なります。そうした選手が混在しているから面白く、一緒に考えを共有し合い、互いを理解することが大切なスポーツともいえます。サッカー以外にも視覚障害者のやるスポーツはありますが、伴走者がついたり、危険を回避するために動きを制限する形式が多いです。ブラインドサッカーはそうした制限がなく一度ピッチに立てば(声や音、触圧覚や筋運動感覚など、普段から反復練習で鍛え、研ぎ澄ませた感覚を駆使して)自分で思いのまま自由に動けるので、選手からは時折「自分が視覚障害者であることを忘れられる」という声をよく聞きます。

---

ブラインドサッカーの試合、観客、ボランティアスタッフの活動など会場の様子を映像と写真で紹介  
第6～10回までの日本選手権

2009年の第3回アジア選手権

2010年の第5回世界選手権

(JBF Aのホームページ、YouTubeにも試合映像、写真などが多数あります)

---

今では、特にブラインドサッカーについてはニュースZEROなど各メディアで特集されるようになり、すこしずつ関心が高まりつつあります。俗に「もうひとつのサッカー・日本代表」などと呼ばれる障害者サッカーは、現在日本に6種目あります。視覚障害者の「ブラインドサッカー」、現在フランスで行われている世界選手権に日本代表も出場している「電動車いすサッカー」、下肢切断者が松葉杖を駆使してプレーする「アンプティサッカー」、脳性まひ者の7人制で行う「CPサッカー」、知的障害者の「IDサッカー」、聴覚障害者の「デフサッカー」です。

このうち「ブラインドサッカー」と「CPサッカー」が現在パラリンピックのサッカー競技の種目として採用されています。1984年のニューヨーク大会でまずCPサッカーが採用され、その後2004年のアテネ大会でブラインドサッカーが採用されました。ブラインドサッカー日本代表は6ヶ国という狭い出場枠もあり、まだパラリンピック出場をはたしていません。

日本にブラインドサッカーがもたらされたのは韓国からで、1999年のことです。韓国には専用の競技場もあります。ブラインドサッカーの存在を知った日本でも、その後2001年にJBF Aの前身となる団体を立ち上げ、ルールも翻訳し、競技を行う環境も整備していき、2003年に初の日本選手権が開催されます。

競技者やサポートする人を増やす意味からもパラリンピックに出場し、存在を幅広く知って頂き、興味や関心を持って頂くことはブラインドサッカーの普及や強化にとっても大変重要です。今回12月に仙台で開催される「第4回アジア選手権」は、そのパラリンピックへの残り1つの出場権が賭かった最終予選です。前回の東京・調布のアミノバイタルフィールドで行われた大会に続いて2大回連続で同じ国で開催されることは異例中の異例です。これは日本代表を応援で後押しする意味でも大きなプラスだと思います。

私が見聞きしてきた中で現在の日本代表は過去最強であり、幾多の国際試合を経験し、非常に成熟したチームです。このチームでパラリンピックの出場を決めれば、間違いなく日本におけるブラインドサッカーの将来の発展に大きな力となります。間もなく大会の公式ホームページが公開され、ボランティアの募集も始まります。ぜひ、一人でも多くの方々の応援、観戦を心より願っております。どうぞよろしくお願い致します。

■アジア選手権公式ホームページ <http://asia2011.b-soccer.jp/>

\*\*\*\*\*

ブラインドサッカー アジア最終予選大会概要

日程 12月22日(木) 12時 日本 VS 中国  
12月23日(金) 14時 日本 VS 韓国  
12月24日(土) 14時 日本 VS イラン  
12月25日(日) 11時 三位決定戦 14時 決勝戦

場所 元気フィールド仙台(宮城野区新田)

\*\*\*\*\*

(文責 泉田)